

<書評>

見えないものが「見える」ようになる，神経病理学の羅針盤

「神経病理インデックス 第2版」

新井 信隆●著

評者 小野寺 理(新潟大脳研究所所長/教授・脳神経内科学)

ある図形から2つの物を見ることができるのに、同時には2つの物に見えない図形を、多義図形といいます。最も有名な多義図形に『妻と義母』があります。向こうを向いている若い妻にも、年老いた義母の横顔にも見える図です。皆さんも見たことがあるかと思います。不思議なことに、一度老婦人に見えたと、妻が見えなくなります。また、一度多義図形であることに気付くと、気付かなかった時期の自分には戻れません。われわれの視覚は、意識に左右されます。見えるようにならないと、永遠に見えません。また一度見えると、次からは、必ず、そう見えるようになります。この現象は、われわれの認知や知覚における、固定観念や予測の働きに関連しているといわれています。

われわれは、ありのままを認知しているのではなく、過去の経験や学習から得た情報を基に、解釈し、意味を与え、認知します。『妻と義母』で起こっていることは、このような認知のプロセスによって生じるものと考えられています。この現象が面白いのは、一度認識した解釈が強くなると、逆の解釈をすることが大変難しくなることです。一度見えてしまうと、もう見えなかった自分には戻れなくなります。

病理の世界でも、誰かが重要性を唱えるまで、見えなかったということがあります。私の専門とするポリグルタミン病のハンチントン舞蹈病における核内封入体は、1997年の夏にBatesらによって、『Cell』の表紙で大々的に提唱されました。この封入体は、1997年に突如現れたのではなく、以前より気付かれていました。しかし、Batesが「見る」まで、多くの病理医には、見えなかったのだといえます。

初学者と、病理のスペシャリストとの大きな違いの1つは、この「見える」脳の違いにあります。本書は、初学者の脳を、どのように「見える」ようにするかに、工夫が凝らされています。最も大きな特徴は、所見を理解しやすく記載した多くのイラストがあることです。このイラストは、皆さんの理解を容易にするとともに、新井信隆先生が何をそこに「視ている」のか、惜しみなく教えてくれます。そして、その所見の意味を、最新の知識を加えながら、かつ、簡潔明瞭に解説されています。通読することも苦になりません。

また、基本的な染色方法は、まとまって触れられることが少ないものです。これらに多くのページを割いて、美しい写真と、新井先生がそれらの染色に期待することまで加えて解説してくれます。このイラストと、写真を見比べれば、一生使える「見える」脳に、皆さんの脳が変化します。「見える」ようになると、もう、その像が浮き上がってくるはずで

す。本書は、本来多くの観察時間を費やして初めて到達できる境地に、皆さんを導くと思います。病理学の初学者から、神経病態学を志す研究者まで、ぜひ、本書を手にとって、ヒトの疾患脳の世界を「見える」ようにしてもらいたいと思います。そして、まだ誰にも見えていない、あなたが世界で初めて「見る」真実を探しに行ってください。本書はその羅針盤となります。

●「神経病理インデックス 第2版」

B5・頁272 2023年07月

定価：11,000円(本体10,000円+税10%)

[ISBN978-4-260-05252-8] 医学書院刊